

# 祭光

## その時に備えて

マタイによる福音書

二五章一〜三節

牧師 高橋和人

756号

2024年9・10月  
日本基督教団  
田園調布教会  
伝道部発行

〒145-0071  
東京都大田区田園調布  
3-34-18  
電話 03-3721-2811  
FAX 03-3721-2814  
<https://den-church.jp/>

今日、読まれましたマタイによる福音書二五章は主イエスのオリブ山での説教の締めくくりにあたります。そしてこれは五章の山上の説教に始まった主イエスの宣教のお働きの締めくくりにあたります。エルサレム神殿での民の指導者や祭司や律法学者たちとの論争を終えて神殿を去る時、主イエスは弟子たちに神殿が徹底的に破壊されることを教えました。

そこから、主イエスは弟子たちに終わりの時に備えて、話し始められました。弟子たちにたとえを語られました。二六章からは主イエスの殺害計画が始まります。十字架の御受難の直前でありました。主イエスは、御自分がまもなく苦しみと死を負われることを知っておられました。オリブ山での説教は終わりの日についてでした。

終わりの日、それは思いがけない時にやってくる(二四・三六)。二四章ではエルサ

レム神殿の崩壊から始まって世界の破壊と混乱、惑わすものが現れ苦難と忍耐の時となる。しかし、その時、福音が宣べ伝えられ(二四・一四)、人の子が来られる(二四・三〇、三一)。弟子たちには終わりの日が、いつ来るか分からない。その時に備えるように教えられます。今日のたとえも、弟子たち、ひいては今の信仰者にも終わりの時の生き方を教えるものです。

さて、ここには前後とは一変して穏やかな情景が語られています。一〇人のおとめたちが登場します。これは花嫁が花婿を迎える場面です。おとめたちは花嫁の友人たちでしょう。花婿は独身最後の夜を友人たちの家を周り、そこで引き留められたり、手荒い祝福を受けたり、花嫁を待たせていつ到着するか分からないのです。おとめたちも着飾っています。到着をともし火で待ち受け、案内するのが役割です。その子たちもおしやべりをし、

次の結婚はだれの番だとか、はしゃいだり、ため息をついたりするのが見えそうです。この一〇人のおとめたちは教会の姿です。花婿の到来におとめは期待と喜びに満ちています。それは、主の再臨を待つ教会の姿です。到着が遅くなり、彼女たちは皆、眠り込んでしまい、その間にもし火の油が尽きてしまします。ほほ笑ましい姿です。そこに「花婿だ、迎えに出なさい」と声が出て、花婿が真夜中に到着します。この到着がおとめたちを賢いものと愚かなものに分けてしまします。五人ずつ丁度半分にしてしまうのです。

一方の五人は予備の油を用意しており、もう一方の五人は用意していませんでした。油は分けてもらえるほどはありませんでした。分けたら、途中でみな消えてしまい、肝心な時にだれもともし火をとむすことができなくなり、愚かなおとめたちは祝宴にも入ることができず、そこから締め出されます。

このたとえは「終わりの日」終末への備えを語るものです。主イエスはここで、日常生活にある、それも結婚式という嬉しい場面で語られました。ここでは、終末を前後の預言やたとえのような恐ろしい場面によってではなく、花婿の到来という喜びとして語っています。

ですから、このたとえは愚かさを裁くことよりも、おとめたちを分けた賢さにあります。予備の油を持つているかどうかはわずかな違いです。それはたぶん日頃ともし火を使っている経験があることが重要になります。と